



ヴェーダのダルマとカール・ユングの個性化： 比較探究

導入

精神哲学であるヴェーダ・ダルマとカール・ユングの個性化理論は、どちらも真の自己実現への道筋を示しています。ヒンドゥー教の聖典（ヴェーダ、ウパニシャッド、バガヴァッド・ギーター）に根ざしたヴェーダ・ダルマは、魂が無知（アヴィディヤー）から義務と自己理解（スヴァダルマ）へ、そして最終的には解脱（モクシャ）へと進化していく過程を描いています。ユングの分析心理学も同様に、精神の道筋を描いています。それは、限定された自我とペルソナへの同一化から、影との対峙、そして無意識の側面（アニマ／アニムスを含む）の統合を経て、統合された自己の出現へと向かう道です。

本報告書では、これら二つの体系の主要概念を比較し、心理的・精神的な次元における自己（あるいは魂）の進化にそれぞれどのようにアプローチするかを説明し、類似するシンボルとアーキタイプをマッピングし、両体系におけるシンクロニシティの役割を、旅路を導く意味深い「ダルマのパンクズ」として解釈します。その目的は、精神的に知識があり、心理学的に知識のある読者にとって、ユングの著作（『赤い書』、『人間とそのシンボル』、『心理学と宗教』など）と権威あるヴェーダの文献（『バガヴァッド・ギーター』、『ウパニシャッド』、古典注釈）からの洞察を補足しながら、体系的で分かりやすい比較を提供することです。

ヴェーダダルマの主要概念

ダルマ：ヴェーダ思想において、ダルマは宇宙の法則、美徳、そして個人の義務、あるいは真の道を意味します。それは普遍的な正義と、個人のスヴァダルマ（自己の本質に沿った個人的な義務）の両方を包含します。バガヴァッド・ギーターは、自らのダルマに忠実であり続けることを強調しています。「たとえ不完全であっても、自らのダルマは、他者のダルマを完遂するよりも優れている。」

¹ この教えは、ユングの「人は他者のペルソナで生きるのではなく、自らの個性化の道を歩むべきである」という考えと並行して、内なる呼びかけに真摯に取り組むことを奨励しています。ダルマは宇宙の道徳的・自然的秩序（リタ）を支え、それに従って生きること、個人と宇宙は調和します。²、

アートマン：アートマンとは内なる自己、あるいは魂、つまり存在の不滅の本質です。ウパニシャッドは、アートマンは究極の実在であるブラフマンと同一であると宣言しています。「微細なる本質であるもの…それが真実である。それが真我である。汝はそれである。」

³ これは、私たちの最も深い自己が絶対者と一体であることを意味します。バガヴァッド・ギーターは、アートマンをすべての心に宿る神として描写しています。「グダケーシャ（アルジュナ）よ、我はすべての生き物の心に座す真我なり。」

⁴ 無知の呪縛に囚われた人は、自我／肉体と自己を同一視し、この神聖なる真我を悟ることができません。ダルマにおける精神修行は、アートマンを偽り人格から識別し、ブラフマンとの一体性を体験することを目指します。

カルマ：カルマとは、倫理的な行為と輪廻を司る因果律です。あらゆる行為、言葉、思考は、人の未来の経験に影響を与える痕跡を残します。ヒンドゥー教では、カルマは輪廻（サンサーラ）の輪廻を促し、解脱に至るとされています。「カルマは個人の経験と人生の状況を形作り、最終的には未来の輪廻を決定づける」のです。

⁵ 重要なのは、ダルマの文脈におけるカルマは責任も意味するという点だ。つまり、自分の選択が自分の現実を創り出すという概念は、

心理学的には、私たちの選択が私たちの生活パターンにどのような影響を与えるかによって決まります。ユング派とヴェーダ派のどちらの視点も、個人の責任を強調しています。私たちの行動と選択は、私たちの精神と人生に響き渡る結果をもたらします。

6 .

マーマー : ヴェーダーンタにおいて、マーマーとは、現実の本質を覆い隠す宇宙的な幻想、あるいは顕現を指します。それは、唯一なるものが多様な世界として現れる力です。マーマーのせいで、私たちは物質世界と自我を实在し、分離したものとして認識し、根底にある統一性を忘れてしまいます。バガヴァッド・ギーターはこう述べています。「まことに、三つのグナから成る、私のこの神聖な幻想（マーマー）を乗り越えることは困難である。しかし、私にのみ帰依する者は、この幻想を乗り越えることができる。」

7 .

ここで「グナ」とは、知覚を束縛する自然の根源的な性質（サットヴァ、ラジャス、タマス）を指します。マーマーを克服するには、霊的な洞察（ジニヤーナ）と恩寵、すなわち無数の姿は神の遊び（リーラー）であり、ブラフマン／アートマンだけが真に実在することを認識することが必要です。

アヴィディヤー : アヴィディヤーとは無知、特に真の自己を知らないことを意味します。これはヒンドゥー哲学における根本的な問題であり、自己を肉体・心・自我と誤って同一視し、結果として生じる霊的認識の欠如です。ある古典的な注釈では、アヴィディヤーはアートマンを覆うパール（アーヴァラナ）として作用すると説明されています。「それはジューヴァ（個々の魂）をサッチダナンダ・ブラフマン（絶対的存在・知識・至福）から遮断してきました。自己認識の夜明けによってパールが取り除かれると、ジューヴァは個性性を失い、ブラフマンと同一視されるのです。」

8

言い換えれば、知識（ヴィディヤー）を通して無知を払拭することは、真の無限の本質を悟ることにつながります。ギーターは光と闇の比喻を用いています。主は信者の心にある「無知から生まれた闇を、知識という輝く灯火によって滅ぼす」のです。アヴィディヤーが払拭されるまで、人は自我に駆られた欲望とカルマの輪廻に囚われたままです。

9 .

モクシャ（解脱） : モクシャとは解脱、すなわち無知と輪廻からの解放です。これはヴェーダのダルマ（教え）の究極の目的です。モクシャは自己実現、すなわち、自らのアートマンがブラフマンであり、永遠かつ自由であるという直接的な体験的知識を通して達成されます。この認識は自我とそのあらゆる執着を消滅させます。ウパニシャッドの一つに「この肉体は生ける自己を失って死ぬ。しかし、生ける自己は死なない」とあるように、アートマンの不滅性を認識することで、死への恐怖と輪廻の束縛から解放されます。モクシャに至る過程には、ヨガ、瞑想、倫理的な生活、そして献身がしばしば含まれます。心の浄化と集中によって、求道者はマーマー（不滅）とアヴィディヤー（無明）を克服します。クリシュナはギーターの中で、バクティ（帰依）とディヤーナ（瞑想）、そして執着なく自らのダルマ（法）を実践することによって、人は自我を消し去り、神聖なる存在に目覚めると要約しています。モクシャとは場所ではなく、存在の状態、すなわち絶対的な自由、平安、そして普遍的な自己との一体感です。これは、後述するように、ユングが大文字の「S」で始まる「自己」、つまり精神の全体性の実現と呼ぶものに相当します。

10

自然

11

ユング派の個性化における主要概念

自我 : ユング心理学において、自我は意識の中心であり、「私」という感覚、つまり日常的な人格です。自我は私たちが「私」として認識する精神の一部であり、意識的な思考、知覚、記憶を通して機能します。しかし、ユングは自我が精神全体のほんの一部に過ぎないことを明確にしています。私たちはしばしば自我人格を自己全体と同一視しますが、これは限られた見方であり、波を海全体と取り違えるようなものです。「『私は自分を知っている』と言うとき、私たちは意識的な（自我の）自己を知っているという意味であり、無意識を知っているわけではない」と、あるユング評論家は書

12 .

12

自我の使命は日常生活を送る上で重要ですが、無意識との繋がりを失ったり、完全に抑圧しようとしたりすると問題が生じます。ユングのモデルでは、成長するためには自我が精神のより大きな力に気づく必要があります。これは、ヴェーダの用語で言えば、個々の「私」が小さな自己を超えたアートマンに目覚めなければならないのと似ています。

ペルソナ :ペルソナとは、社会の要求に適応するために自我が身につける社会的な顔または仮面のことである。

ユングはペルソナという用語を、俳優の仮面を意味するラテン語から借用した。それは

13

私たちの公的なイメージ - 私たちが演じる役割（例えば、忠実な専門家、思いやりのある親、礼儀正しい市民）とアイデンティティ

私たちは投影します。ペルソナは、個人が集団規範に適合するのを助ける、必要な適応です。しかし、

それは真の内なる自分ではなく、妥協であり、「一方では明確な印象を与えるために設計された」ものである。

一方で、他人に圧力をかけ、他方では個人の本質を隠すためでもある。」

14

ペルソナは浅薄さと神経症につながる可能性がある。「人工的なペルソナのために自分自身を捨てることはできない」

ユングが言ったように、「罰なしの人格」である。

15

ユングの見解では、ペルソナは意識の一部である

精神であり、より深い自己への入り口として機能します。硬直しすぎるペルソナは、最終的には「無意識の

人々を個性化の道へと向かわせる「乱気流」である。つまり、ペルソナは

16

社会のために私たちがかぶるマヤの仮面は役に立つかもしれないが、仮面を本物の自分。

影 :影はユングの最も有名な概念の一つであり、隠された、抑圧された、あるいは

人格の否定された側面これらの側面はしばしば否定的な性質（怒り、利己主義、

自我はそれを認めようとせず、「影を落とす」のです。しかし、その影は

生い立ちや社会によって無視されてきたポジティブな潜在能力も含まれる。ユングはこう書いている。「誰もが

影を帯びており、個人の意識生活にそれが体現されなければ、それはより黒く濃くなる。

は" 18

。言い換えれば、私たちが自分の内なる闇を抑圧したり無視したりすればするほど、それはより強力に

無意識に蓄積され、私たちに妨害する可能性があります。影は夢や

空想は「自分自身の隠された罪悪感に満ちた部分を表している」ため、敵対的な人物（悪魔、怪物、または暗い双子）として描かれる。自分の欠点や恐怖に立

ち向かい、「暗闇を意識させる」。光 17

影を統合することは個性化の重要なステップです。それは正直に

の姿を想像することで悟りを開くのではなく、暗闇を照らすことで悟りを開くのだと観察した。

18

全体性を取り戻す。ユング

19

。これは、アビディヤーを払いのけるヴェーダの旅と重なります。内なる「無知」や影に直面することによってのみ、

人はそれを変容させる。ユング派の実践における影の統合のプロセスは、倫理的な自己浄化と並行している。

ダルマの実践においては、どちらも勇氣、謙虚さ、そして内面にあるものに対する誠実さを必要とします。

アニマとアニムス :ユングは、アニマ（ラテン語で「魂」、女性名詞）とアニムス（男性名詞）という用語を使って、

個人の内なる性反対の魂。男性の精神においては、アニマは無意識の女性性である。

要素;女性の精神において、アニムスは無意識の男性的要素である。これらの原型のな

20

人物像は、私たちが示す人格を補完する魂の特質を表しています。例えば、男性は

意識的に非常に男性的なペルソナを自認しているが、敏感で直感的なアニマを持っている、あるいは

女性性、自己主張、知性、強さを表す内なるアニムスを持っているかもしれない。

外向きには発達していない。ユングはアニマ/アニムスを自我と集合体の間の橋渡しとみなした。

無意識のうちに、彼らは夢や空想の中で、謎めいた愛する人物（例えば男性）として現れることが多い。

女性の指導者、賢明な男性の姿を夢見る。これらの内なる人物と関わることは、

個性化: 人は完全な人間になるために、自分の異性の魂のイメージを認識し、統合しなければなりません。

最終目標は、自己の内部における相反するものの神聖な結合、すなわち合一であり、それは結合によって象徴される。

錬金術的な意味での（神聖な結婚）である。これは、神聖なる自己が超越的に存在するという東洋の象徴的な考えと類似している。

性別と両方の側面を含む - 例えば、ヒンドゥー教のアルダナリーシュヴァラ像はシヴァの半分の神である

（男性）と半分のシャクティ（女性）のこの図は、アニマとアニムスがひとつの存在の中に結合していることを美しく示しています。

23

ユングのアニマ/アニムスの概念は、異性との出会いがなぜそれほど大きな影響を与えるのかを浮き彫りにしている。

強力な心理的影響 - 私たちは自分の内なるアニマ/アニムスを他人に「投影」する傾向があります。これらの

投影し、自分自身の中にそれらの性質を所有することは、自己実現に不可欠です。

自己 :ユング理論において、自己（大文字の「S」）は精神の全体性、すなわち意識と無意識の両方の側面を含む完全な存在です。それは全体性の中心的な原型であり、精神の内なる導き手です。ユングは自己を「中心であるだけでなく、意識と無意識の両方を包含する円周全体でもある。自我が意識の中心であるように、自己はこの全体性の中心である」と表現しています。

24 言い換えれば、自我は自己というずっと大きな円の中にある小さな円のようなものです。自己はしばしば私たちの「内なる神性」または内なるイマーゴ・ディ（神の像）と表現されます。実際、ユングは自己を「『私たちの内なる神』と呼ぶこともできる」と言いました。これは、²⁵心臓にある神の自己であるアートマンという概念と驚くほど類似しています。自己は、全体性や中心を示す夢やシンボル（たとえば、賢い老いたガイド、神の子、曼荼羅、宝石、または統一のシンボル）の中に現れます。それは、内なる権威、平和、または神秘的な存在の深い感覚として経験されます。重要なのは、自己は経験的な現実であり、シンクロニシティの出来事、意味のある夢、内側から導かれているという直感を通して明らかになるということです。ユングは、意識的な生活のバランスが崩れると、自己は補償的な信号（「夢の中の信号…本能、予感、直感、シンクロニシティ」）を送り出し、自我が何に注意を払うべきかを示唆すると指摘しました。このように、自己は内なるグルとして機能し、まるでクリシュナがアルジュナを導いたかのようです。個性化とは、究極的には自我と自己の間に生き生きとした関係性を築くことを意味し、ユング派ではこれをしばしば自我-自己軸と呼びます。このつながりは人生に「エネルギー、興味、意味、そして目的」を与えますが、それが壊れると、人は空虚感と無意味さを経験します。

26

27 要するに、ユングの「自己」は概念的にヒンドゥー教の「アートマン」に非常に近い。それは人間の最も内なる本質であり全体性であり、断片化された自我を超えた真の自己として発見される。どちらの体系も、この自己を実現すること（あるいはそれと調和すること）を至高の目的としている。

個性化 :個性化とは、個人の心理的統合と成熟という自然な過程を指すユングの用語です。これは、文字通りの「個人」、つまり分割不可能な全体になるという考えに由来しています。ユングは個性化を、精神の様々な要素を統合することで、人が「明確で、統合され、全体」となる過程と定義しました。

28 これには、無意識（影、アニマ/アニムス、その他の元型的影響を含む）を認識し、受け入れ、統合することが含まれ、意識的な人格が自我の限界を超えて拡張できるようになります。個性化は多くの場合、最終的に新しいバランスにつながる内部葛藤や危機（ユングが「エナンティオドロミア」または対立物の緊張と呼んだもの）によって特徴付けられます。最終結果は、より自己実現した人、つまり自分のより深い目的、内なる導き、本物の性質と調和した人です。ユングは個性化を精神的であると同時に心理的な旅だと考えていました。彼はそれが東洋と西洋の神秘主義的伝統の目的と類似していると指摘しました。特に、個性化は「完璧」になることや社会的に慣習的なことではなく、むしろ光と闇、男性と女性、意識と無意識の両方を調和のとれた統一体に取り入れ、全体になることです。ある意味では、それは精神における解脱、つまり悟りを得ることに相当すると言えるでしょう（ただし、ユングは心理学的な観点から捉えていました）。個性化は生涯にわたって展開し、神話においては英雄の旅路として象徴されることが多く、この旅路はダルマ思想における魂の旅路と不思議なほど類似しています。

自己の旅の段階 :ダルマの道と個性化

ヴェーダのダルマとユング派の個性化はどちらも、断片的あるいは幻想的な自己意識から、目覚めた完全な自己へと向かう漸進的な進化を描いています。以下は、主要な段階とその類似点の比較概要です。

- ・ 無知と自我 :旅は通常の意識状態から始まります。ヴェーダの用語では、魂はアヴィディヤ（無知）の状態にあり、マヤーに魅了され、心身と同一化しています。ユング派の用語では、これはペルソナと同一化し、無意識に気づいていない自我意識に相当します。
- ・ 個性化の始まり :この状態では、その人のアイデンティティは社会的な役割と表面的な欲望に限定され、神聖な

自己、あるいは深層心理が曖昧になっている。ギーターの冒頭で、自らの義務について落胆し混乱しているアルジュナは、アヴィディヤー（無知）に曇らされた魂の典型である。ユングも同様に、現代人はしばしば「外面的に」ペルソナの中で生き、それゆえに内なる空虚さや混乱を感じていると述べた。この段階での課題は、自我の理解の限界を認識することである。アルジュナが現在の知識が不十分であることを悟り（クリシュナの知恵を求めるよう促された）、個性化過程にある個人は、自我が家の真の主人ではないことに気づき始める。この芽生えつつある認識は、しばしば危機や深い無意味感によって引き起こされるが、内的・外的両面における冒険への呼びかけである。

コンテキスト。

- スヴァダルマの呼び声 - 内面へ向かう :ダルマの道では、無知に気づいたら、人は自分のスヴァダルマ、つまり魂と一致する自分の真の道または義務へと向かいます。スヴァダルマは文字通り「自分のダルマ」を意味し、各人が人生において独自の使命または計画を持っていることを示唆しています。バガヴァッド・ギーターは、他人の道を真似るのではなく、たとえ困難であっても自分の内なる法に従うべきだと助言しています。心理学的には、これは集団の期待（ペルソナ）を満たすために生きるのをやめ、代わりに意味の真の探求を始める瞬間に共鳴します。ユングは、中年期前後の多くの人が、おそらく繰り返される夢、不満、またはシンクロニシティなどを通じて、無意識からの「呼び声」を聞いて、個性化を促していると指摘しました。自分のスヴァダルマを受け入れるには、しばしば影と対峙する必要があります。アルジュナにとって、戦士としての使命に従うということは、親族と戦うという苦痛に満ちた義務に立ち向かうことを意味し、人生と自分自身の暗い側面との象徴的な対決でした。

同様に、個人にとって、魂の道を歩むことは、必然的に内なる悪魔や抑圧された内容を引き起こします。人は自身の恐れ、傷、そして社会的に受け入れられない欲望（ユング派の影）と向き合わなければなりません。この段階は葛藤と浄化の段階です。ユング派のセラピーでは、個人的なトラウマや道徳的ジレンマを乗り越え、自分の人格の否定された側面を統合することが含まれる場合があります。

精神修行においては、自己鍛錬（ヨガのヤマ／ニヤマ）、倫理的な生活、そして場合によってはグルからの指導によって自我の抵抗を克服することが必要となる。どちらの体系も、この対峙を極めて重要視している。ユングは、影を統合することが真の個性化につながると記している。つまり、人は自己全体を受け入れることで、より現実的で確固とした人間になるということです。ヒンドゥー教の用語で言えば、無知を克服し、ダルマに従うことは心を浄化し（チッタ・シュディ）、アートマンを知覚する準備を整える。

32

- アニマ／アニムス - 内なる伴侶 :この旅の並行する側面は、内なる女性性と男性性の統合です。多くの精神的伝統において、進歩は対極の融合によって象徴されます。例えば、ヨガやタントラには、シヴァ・シャクティの統合（意識とエネルギーの融合）という概念があります。ユング派の個性化において、同様の課題はアニマ／アニムスの統合です。ユングは、すべての人が投影された魂のイメージを取り戻さなければならないと信じていました。男性は、自分が「外の世界」に求めている女神が、実は自分の精神の中にいることに気づかなければなりません（女性も同様です）。これは人間関係から身を引くことを意味するのではなく、依存や幻想ではなく、内なる完全性に基づいて他者と関わることを意味します。ヴェーダ神話のアルダナリーシュヴァラ（半人半女の神）はこの統合の完璧な原型的イメージである。全体性には両方の性別が含まれており、創造自体がこれらの相補的な力の遊びであることを示す。ユングは、アニマとアニムスが認識され尊重されると、それらは無意識へのガイドとして機能すると指摘した。まるで異性の内なるグル/ガイドが自己からのメッセージを仲介するかのように。多くの人々は、指導を与える賢い女性または男性の鮮明な夢を通して、または自分自身のアニマ/アニムス特性のバランスを強いられる人生における深い癒しの関係を通して、この段階を経験している。この統合の結果は、多くの場合、新たな内面的なバランス、創造性、および関連性であり、まるで魂の2つの翼が同時に調和して羽ばたき始めるかのようだ。

23

22

・ 自己実現と解脱 :この二つの旅の頂点は、真の自己の実現です。ユング派の用語で言えば、これは自己の原型が人格の新たな中心として出現し、自我を相対化することを意味します。ある評論家がユングのプロセスを説明したように、自我は「内なる偉大な存在と出会い、至福のうちにその中に溶け込む」のです。これは自我が破壊されるという意味ではなく、むしろ完全な自己であるという暴君的な幻想を放棄することの意味します。自我はより深層の自己と調和し、統合、意味、そして目的のある状態へと至ります。ヴェーダの用語で言えば、頂点はアートマン・ブラフマンの実現、すなわち解脱です。個々の魂は「私はブラフマンである」 (アヤム・アートマー・ブラフマー)と認識し、カルマと無知のあらゆる束縛から解放されます。ウパニシャッドや神秘主義者が述べているように、これには多くの場合、すべての存在との一体感を伴います。

ユング心理学は心理学であるため、形而上学的な用語で表現することはないが、多くの人がその類似点を指摘している。個性化の目標は、精神的伝統における悟りを開いた自己と不気味なほど類似した自己である。ユング自身も東洋の文献を研究し、東洋における自己を神聖な核心とする概念は、自身の心理学的概念と非常に類似していると述べた。ただし、心理学は経験に基づくものであり、形而上学に基づくものではないという但し書きは付されている。

35 この最終段階では、皆既日食のシンボルが頻繁に現れます。

例えば、ユングの患者は、自己実現の段階で自発的にマンダラ (中心のある円)を描きました。ヒンズー教と仏教の慣習では、マンダラは統一と宇宙の体験を呼び起こす瞑想の補助³⁶として使用されます (次のセクションを参照)。どちらも、精神の全体性の直観的な言語を示しています。自己のもう1つの一般的なシンボルは、神の子または内なるガイドです。ギータでは、心臓のクリシュナは内なるガイドとしての自己のシンボルです。ユング派の夢では、内なる自己を表す光り輝く子供または賢者のイメージを持つことがあります。この段階に達すると、人は深い解放感を感じることがよくあります。人生は有意義であると見なされ、死は恐れられず (自己は生と死を超えていることを知っているため)、すべての極性を包含する慈悲深く全体的な見方があります。これは、ヴェーダーンタのジーヴァンムクティ、つまり「生きながら解放される」ことに似ています。したがって、個性化は単なる個人の成長ではありません。精神的な意味での解脱と同じように、個性化は人の存在を根本的に変化させます。

これらの類似点をまとめると、以下のステージの比較が考えられます。

ダルミック ステージ/ コンセプト	ユング派ステージ/ コンセプト	説明と類似点
アビディヤー (無知 自己)	自我 識別 & ペルソナ	初期状態 :幻想の中で生き、自我と社会的ペルソナのみに同一視する。真の自己／アートマンは知られておらず、無知によって「覆い隠されている」。ユングの自我は無意識に気づかず、仮面が自己であると信じている。これは精神的な無知 (アヴィディヤー)に類似した心理的な無知である。
マーヤー (幻想の 世界)	超能力者 予測	どちらも欺瞞的な現象を指しています。マーヤーとは、悟りを開いた者が現実だと思い込む、神の多元性という幻想です。ユング派の用語で言えば、自我は投影に ⁷ 、 ⁷ によって欺かれ、実際には内側にあるものを外側から見ているのです。どちらの体系も、この幻想を見抜くことを促しています。例えば、マーヤーの背後にある統一性を知覚し、投影を撤回して物事をありのままに見ることです。

ダルミック ステージ/ コンセプト	ユング派ステージ/ コンセプト	説明と類似点
スヴァダルマ (自分の真の道)	個性化 パス	転機 :真の道、あるいは使命を受け入れること。ダルマにおいて、スヴァダルマに従うことは、神から与えられた役割（それがどんなに謙虚で困難であろうと）を尊重することを意味します。 ¹ ・ ユング派の用語で言えば、これは個性化へのコミットメント、つまり他者の期待に従わずに、精神の全体性への呼びかけに耳を傾けることです。どちらも誠実さを必要とし、しばしば社会的な条件付けに逆らうことになります。
シーラと自己規律（倫理の実践）	シャドウワーク& 道徳 統合	浄化の作業 :ヴェーダの修行では、美徳を培い、悪徳を一掃し、ユング派では、影と対峙し、自分の欠点や隠れた側面を認めます。 ¹⁸ どちらのプロセスも倫理的に変革をもたらし、より大きな全体性をもたらします。つまり、「闇を意識化」し、それによって無知/悪の力を解消するのです。 ¹⁹
グル（外的または内的ガイド）	賢い老人/ 女性 アーキタイプ	導きの原則 :ヒンドゥー教徒はグル、あるいは内なるクリシュナ／アートマンを導き手として頼ります。ユング心理学では、夢に賢者や賢女の原型が現れ、自己からの導きを象徴するとされています。例えば、クリシュナがアルジュナに「私は心の中にある…我は真我である」と告げる場面は、真我が内なる賢者として語りかける場面に似ています。どちらの伝統も、意識が調和すると、導きは内からもたらされると主張しています。 ⁴
アニマ/ アニムス 結合（シヴァ・シャクティ）	翹望 (接続)	男性性と女性性の二元性の統合。タントラと神話において、神聖な合一（例えばアルダナリーシュヴァラ）は、一なるものにおける相反するものの不可分性を象徴する。ユングのアニマ・アニムスの合一は、統合された自己を生み出す内なる神聖な結婚である。 ²³ どちらも、全体性を陰陽、すなわちブルシャ・プラクリティの調和のとれたバランスとして描いている。
アートマン- バラモン 実現	自己実現 (自己アーキタイプ)	目標とクライマックス :解脱において自己と絶対者（アートマン＝ブラフマン）の一体性を実現することと、個性化体験において自己を精神全体の統制中心として実現することは、類似点がある。すなわち、一体性、完全性、そして既成の制約からの解放の状態である。 ²⁴ 。そのユングは自己を「内なる神」、つまり「自我を超越する」永遠の側面にさえ例えた。 ²⁵ ³⁸ 。どちらの場合も、個人のアイデンティティは部分的（自我/身体）から全体的（自己/精神）に移行します。

このマッピングは、どちらの道も断片化から全体性へと移行することを示しています。ヴェーダの旅は魂を幻想から解放し、ブラフマンと再統合させますが、ユングの個性化は精神を無意識の衝動から解放し、自己のもとに統合します。言語と形而上学には違いがあります。ユングは臨床家として慎重に語りましたが、ヴェーダータはあからさまに形而上学的です。しかし、経験的な共鳴は明らかです。ある学者が指摘したように、ユングの自己概念は「ギータのアートマンと驚くべき類似点がある」のです。

³⁴ これは、両方のフレームワークの根底にある変革の普遍的な原型を示唆しています。

象徴的な横断歩道 :東西の原型的なシンボル

シンボルは精神と魂の言語である。ユングとヴェーダの予言者たちは共に、
深遠な真実はしばしばイメージや比喩で表現されます。多くのシンボルは東西の境界を越えています。
それぞれの文脈で似たような意味を持つ。以下では、いくつかの重要なシンボルとアーキタイプを解釈する。
ユング心理学とヴェーダの伝統の両方に現れる：

- マンダラ（聖なる円）：最も印象的な類似点の一つは、マンダラのシンボルです。
サンスクリット語でマンダラは「円」を意味する³⁹。ヒンドゥー教と仏教の実践では、マンダラは精神的なものである
図表（多くの場合、複雑な幾何学模様の円形デザイン）は宇宙や世界の地図を表す。
意識⁴⁰ 瞑想や儀式において、人々を導く「聖なる空間」として使われます。
心を多様性から統一性へ（心の中でマンダラの中心へ向かうことは、
統合の旅⁴⁰ ユングは独自に、マンダラのシンボルが浮かび上がることを発見した。
心理的な問題を抱えていた時期の患者（そして彼自身）の夢やアートワークに自発的に現れた。
彼はこれらの「マンダラのような絵」に関する研究を発表し、「自発的な
マンダラの制作は個性化のプロセスにおけるステップであり、精神が
統合され、全体的な癒しとなり、精神の性³⁶ ユングは、マンダラを描いたり、熟考したりすることには
格に中心化効果をもたらし、その象徴的な内容を通じ^{41 42}。彼はこう書いている。「ほとんどのマンダラは直感的で非合理的な
て、無意識に遡及的な影響を及ぼします…
アイコンのように「魔法的な」意味を持っている。」⁴³。これはマンダラの伝統的な使用法と一致しています。
心を集中させ、神聖なものを呼び起こす魔法陣として知られている。東洋も西洋も、
マンダラは、自己の全体性、バランス、そして相反するものの調和を象徴する力強いシンボルです。
寺院、教会、ヤントラ、さらにはバラ窓がマンダラの形をとっていることが多いのは偶然ではありません。
心理的にも精神的にも、マンダラは私たちの中に中心が存在することを肯定します（ユングの自己、
アートマン（真我）を中心に、すべての経験が組織化されます。

東西のマンダラ :瞑想に使われた17世紀のチベットのマンダラ（左）とカール・ユングのマンダラの一つ
『レッドブック』の曼荼羅画（右）。どちらも宇宙の秩序に囲まれた神聖な中心を描いている。
ユング派の分析によれば、マンダラのモチーフは精神の統合と自己実現への動きを示している。東洋の実践では、マンダラを作成または視覚化する³⁶。
ことは、心を普遍的な自己と一致させ、
瞑想者は「宇宙の崩壊と再統合のプロセス」を通して精神的な完全性へと向かう⁴⁰。

- 光と闇（知識と影）：光と闇は知識の普遍的な象徴である
無知と対比される。ウパニシャッドとギータでは、光（ジョティ）はヴィディヤー、つまり真の光明を表す。
知識を表し、闇（タマス）はアヴィディヤー、つまり真実を覆い隠す無知を表す。ギータ
クリシュナが知識のランプで闇を払うと言うとき、この比喩が使われています。
象徴主義において、暗闇に光をもたらすことは、まさに影を統合する作業である。ユングは
同じ言葉で言う：「人は光の姿を想像することによって悟りを開くのではなく、
「闇を意識して。」³² ここで「悟りを開いた」は心理的な意味で使われているが、それは美しく
悟りの精神的なプロセスを反映している - 無意識に意識の光を当てる
（影）は無知の闇を払う。影そのものは夢の中で暗い影として現れることがある。
人物、怪物、または暗い場所にいる存在など、夢想家がこれまで見えなかったものに光を当てるよう促す。
ヒンドゥー教の象徴では、無知は悪魔や暗闇によって擬人化されることがあります。
光の神は破壊する。例えば、女神ドゥルガーは水牛の悪魔（
彼は無知と低俗な本能を否定し、マハーマーヤ（幻想を晴らす偉大な人）と呼ばれています。ユングは
そのような神話を、自我／自己が影を克服するという精神の典型的なドラマとして解釈する。
フレームワークは、暗闇に立ち向かうために恐れを知らず正直な態度を奨励します。実際には

言葉で言えば、これは告白、セラピー、自己反省、あるいは瞑想的洞察といった、かつて無意識だったものに「意識の光」を照らすあらゆる形態を意味します。結果は同じです。影を統合することで、閉じ込められていた精神エネルギーが解放され、より完全な状態が達成されます。これは、無我（アビディヤー）を払拭することで光り輝く自己が明らかになると同様です。

賢い老人/グル:ユングは賢い老人(または賢い老女)を、人がより深い自己からの導きを必要とするときによく現れる元型であると特定しました。この人物は、祖父、教師、魔術師、または知恵を伝える年配のガイドとして夢に現れることがあります。それは人類の集合的な知恵または内なるグルを表しています。東洋の伝統では、グル(精神的な教師)は確かに神聖な自己の外的な具現化と見なされており、弟子を悟りに導くことを意図しています。最終的に、真のグルは内におり、ヒンズー教では内なるガイドであるクリシュナとして擬人化されることがよくあります。ギータでは、クリシュナが宇宙の姿を明らかにした後、アルジュナは神聖なガイドがずっと彼の馬車に乗っていて、彼を導いていたことに気づきます。クリシュナは、「私はアートマンであり、すべての生き物の心に座っている」と言い、究極のグルは自分の自己であることを暗示しています。ユングの思想はこれを反映している。賢老人は本質的に自己の知恵の擬人化である。マリー・ルイーゼ・フォン・フランツ（ユングの弟子）は、人はこの内なる導きに耳を傾けると、孤独感が薄れ、内なる羅針盤によってよりはっきりと導かれると感ずることが多いと指摘した。ユング自身にも、想像上の対話（『赤の書』に記録されている）に登場する賢くて空想的な老人フィレモンがいて、深い洞察を彼に伝えた。ユングはフィレモンを無意識の真の「導師」として扱った。したがって、象徴的な横断歩道では、クリシュナ、ブッダ、または賢者が、ユング用語で賢明なガイド、または内なる導師であるフィレモンに相当し、どちらも旅のある時点で、内なる知恵の源に頼り始めることを示している。

シンクロニスティ的に、人は準備が整えば、外の世界でもメンターや支えとなる人物に出会うかもしれません。外の世界のグルは、内なるガイドのシンクロニスティ的な具現化と見ることができます。最終的に、このプロセスは自己の声を信頼することへと繋がります。

合一 - 神聖な夫婦:多くのスピリチュアルな神話では、完全性を表すために神聖な夫婦や神聖な結婚の象徴が用いられています (例: 道教の陰陽、または神秘的なキリスト教における神と魂の結合)。ヒンズー教では、すべての神々は配偶者としてシャクティ(力)を持っており、神は男性意識と女性エネルギーの結合であることを象徴しています。印象的なイメージは、半分男性で半分女性のシヴァの姿であるアルダナリーシュヴァラです。このイメージは、最高の自己は二元性を超えており、性の反対を包含し、調和させることを教えています。ユング心理学では、これに相当するのはアニマとアニムスの統合であり、彼が「内なる結婚」と呼ぶ結果になります。人がアニマ/アニムスを統合すると、内なる反対を他者に投影することはなくなり、その代わりに、自己の出現の前兆となる内なる結合が達成されます。ユングは、錬金術におけるコンイウンクティオ²³（王と女王の結合）の図解が、精神におけるこのプロセスの象徴であると見ていました。ユングが、インドのヨガやタントラの図像が長らく描いてきたのと同じ考えを間接的に利用していたというのは興味深いことです。さらに、ユングの心理学的両性具有の概念（完全な人間は性別の固定観念に制限されず、人間のあらゆる資質にアクセスできる）は、性別を超越するという精神的な考えと共鳴します。ブログの著者が質問のプロンプトノートに引用しているように、ユングのアニマとアニムスの類似点は、これらの古代の教えに信憑性を加えています。実際には、この象徴主義は、論理と直感、勇気と慈悲、行為と受容性など、すべてが個性化された/自己実現した人の中にある場所を見つけなければならないというバランスを求めることを思い出させてくれます。

自己（中心）の象徴 :どちらの体系にも、自己、あるいは究極の現実を指し示す多くの象徴があります。曼荼羅はその一つとして論じましたが、他には宝珠や蓮華があります。東洋の文献では、蓮華は魂の開花の象徴として頻繁に用いられます。泥（物質的生命）に根ざしながらも、光の中で花開くのです。

（霊的真理）。例えば、チャクラシステムは、各中心に蓮華が開き、冠の千弁蓮は完全な啓示を象徴している。ユング派も同様にブレイクスルーに近づいているクライアントは蓮や黄金の花を夢見るかもしれない。興味深いことに、ユングは彼は『黄金の花の秘密』（道教のテキスト）の解説を、個性化。ヒンドゥー教/仏教の伝承における宝石（ラトナ）は、人間の存在の貴重な核を象徴する。（有名なマントラ「オム・マニ・パドメ・フム」は「蓮華の中の宝石」を意味します）。それに応じて、ユングはこう言いました。自己は夢の中でダイヤモンド、真珠、水晶などの宝石として現れることがあります。個人の永続的で破壊不可能な本質 もう一つの共通のシンボルは子供です。²⁵⁻³⁴ ヒンドゥー教ではクリシュナやガネーシャの子供の姿を神の無垢として崇拝しており、ユングは神の子の原型は、意識的な人格が新しく生まれ変わるときに現れることが多い。より統合された形態。ユングは中央に黄金の子供を描いた曼荼羅を描いた。自己の誕生を象徴すると解釈されている。最後に、木について触れておきたい。木はインドにおける宇宙の象徴（アシュヴァッタ、ギータの逆さまのバンヤン）であり、また個性化でもあるシンボル（ユングは生命の樹を、深く根を張りながらも空に向かって伸びる自己の成長と結び付けました）。どちらも、自我を超えた源から養われる、完全性に向かう有機的な成長を意味します。

要約すると、シンボルは意識と無意識（あるいは人間と社会）の間の橋渡しとして機能します。ユングとヴェーダの賢者は、これらのシンボルを理性的な言語に直接翻訳することが豊かさを失うのではなく、瞑想し、体験しなければならない。マンダラの絵、神話シヴァとパールヴァティー、あるいは明るい部屋に入る夢は、論理では伝えられないことを魂に伝える。これはユングが能動的な想像力を奨励した理由と、ヒンドゥー教が色彩豊かな神話に溢れている理由。精神の母国語で話す。ユング派とヴェーダ派の視点の間の「鍵となるシンボルの交差点」自己実現の共通の象徴的文法を明らかにし、自己の旅にはそれぞれの文化が独自のスタイルでそれを語るとしても、それは普遍的な性格を持っています。

シンクロニシティとダルマ :道に沿った「ダルマのパンくず」

特に興味深い収束点は、シンクロニシティの概念である。これはユングが定義したものだ。意味のある偶然の一致とは、因果関係はないが、主観的に意味のある瞬間のことである。シンクロニシティとは、外部の出来事が、単なる偶然とは思えないほど意味深く内部の状態を反映しているとき（例えば、友人が電話をかけてきた時にその友人のことを考えたり、ずっと疑問に思っていたことに対する答えが書かれた本を見つけたり、ユングは、このような偶然は偶然ではなく、根底にある何かを暗示していると提唱した。線形因果関係を越えた接続原理彼はシンクロニシティを「非因果的接続原理」と呼んだ本質的には、メカニズムではなく意味を通して精神と物質を結びつける自然の方法

48

ユングの視点から見ると、シンクロニシティは自己からの道標として機能します。彼は、人が個性化の道を行っていると、まるで精神や宇宙がフィードバックと指導を提供する。ユングはスカラベの有名な話を語った。セラピーセッションで、患者は金色のスカラベの夢について語った。その瞬間、本物の昆虫（スカラベのようなユングの窓にカブトムシがぶつかってきた。驚くべき偶然だ。ユングは生きたカブトムシを患者に見せた。「スカラベはここにいます」と言い、患者の硬直した合理主義に突破口を開いた。ユングによれば、この出来事は、患者の自我防衛を「打ち破り」、彼女をより深い精神的素材にまで及ぶより広い意味では、ユングは意味のある偶然は精神と世界の統一の表現であり、私たちの内的経験と外的経験が織り込まれていることを示唆している。より大きな意味のタペストリー。「シンクロニシティは、見る目を持つ者にとって常に存在する現実である」とユングは述べた。書いた

51

53

さて、これをヴェーダやダルマの用語に翻訳すると、枠組みは異なるものの、類似した考えが見つかります。

ヒンズー教の哲学では、シンクロニシティと同一の用語は明示的には使用されていませんが、カルマとリタ（宇宙秩序）の概念は、宇宙には真にランダムなものは何もないことを示唆しています。すべての出来事は、自然の秩序と真実の原理であるリタの構造に織り込まれています。したがって、出来事が意味のある形で並ぶとき、ヒンズー教徒や仏教徒は、それを適切な時にカルマが成熟したこと、または神の意志が明らかになったことと解釈する場合があります。たとえば、「弟子の準備ができたとき、グルが現れる」ということわざがあります。これは、一種のシンクロニシティの哲学を反映しています。つまり、人の真摯な内なる準備（アディカーラ）によって、宇宙は必要な教師や教えを送ってくれるのです。これらはダルマのパンくず、つまり、自分が正しい道を進んでいるか、進路を調整する必要があるかを示す小さな兆候です。

バガヴァッド・ギーターの中で、クリシュナは献身的な人々を導き助けると述べています。「私は彼らの心に住み、慈悲の心から、知恵のランプで無知の闇を破壊する。」

これを解釈する一つの方法は、内なる神聖なる自己が、探求者を助けるために条件（場合によっては外的な出来事さえも）を整える、つまり宇宙の知性（ブラフマン）が個人の状態に意味のある形で反応するというものです。これはユングがシンクロニシティについて直感したものに似ています。実際、ユングはこの考えを形成するにあたり、東洋思想の影響を受けていました。彼は中国の易経と道（タオ）の概念を知っていました。道では、硬貨やノコギリソウの茎を投げることで、使用者の内面状態と意味のある形で一致する神託がもたらされます。その原理もまた非因果的であり、意味のある相互関連性に基づいています。同様に、インドでは伝統的に、占星術や前兆は、自身の努力が宇宙的にどのように調整されているかを示すものとして、つまり決定論的な運命としてではなく、導きとして、参考にされてきました。インドの現代的な精神的観点では、「もしあなたが自分のダルマに従えば、宇宙はあなたを支えてくれる。もしあなたが道を踏み外せば、あなたは障害に遭遇するだろう」と言えるかもしれません。こうしたサポートや障害は、予期せぬ偶然や出来事という形で現れることが多いです。

比較的な観点から言えば、シンクロニシティ＝非因果的な意味のある繋がり、カルマ＝因果的な道徳的な繋がりと言えるでしょう。しかし、ある道を歩む個人にとって、その経験は非常に似たものとなる可能性があります。どちらも、内的出来事と外的出来事が一致する、相互につながった宇宙を暗示しています。ユング派は、意味のある偶然の連続は自己の交信であると言うかもしれません。ヒンズー教徒は、それはバガヴァン、あるいは自身のアートマンが導きを与えているのだと言うかもしれません。特に、著者のマドゥ・ワングは、ユングの自己が「夢の中で…予感、直感、シンクロニシティ」という信号を送り、自我が進路を修正できるようにしていると説明しています。これは、アートマン・ブラフマンが信者を「前兆」や直感的な導きを通して促すという説明と容易に誤解される可能性があります。

例を挙げて説明しましょう。ある人が自分の使命（ダルマ）について深い疑問を抱いているとします。書店に行くと、棚から本が文字通り落ちてきて、まさにそのテーマを論じたページが開かれます。ユング派はシンクロニシティ、つまり外的な出来事が内面の状態を反映し、この本がその人にとって重要な意味を持つことを示唆していると見なします。スピリチュアルなヒンズー教徒は、神の導き、あるいはブラーラバダ・カルマの働きによって、その人の求める答えへと導かれていると見なすかもしれません。どちらの解釈においても、この出来事はパンくずのようなものと捉えられます。単なる偶然の可能性は無視され、高次の、あるいは無意識の秩序によってもたらされた、意味のある繋がり重視されます。

ユングはシンクロニシティを宇宙秩序の概念と明確に結びつけました。彼は、シンクロニシティは「根底にある秩序を明らかにする」ものであり、「万物の相互関連性」を反映するものと述べています。興味深いことに、ヒンドゥー教のカルマの概念もまた、すべてのものがつながっていることを強調しています。過去の行為、たとえ前世の行為であっても、因果の網の中で現在の状況とつながっているのです。カルマは通常、直線的な因果関係として考えられますが、この教義は人間の理解を超えた複雑で目に見えないつながりも許容しています。シンクロニシティとカルマはどちらも「個人の責任の重要性を強調する」ものです。

6 – ユングは強調した

意味のある偶然の一致は、カルマの結果が魂に教訓を与えることを目的としているのと同じように、個人にさらなる認識や変化を求めるメッセージを伝えることがよくあります。

シンクロニシティは、リアルタイムで届けられるカルマのメッセージと言えるかもしれません。シンクロニシティは、自分が真の道に合致しているかどうかを示す、宇宙からのフィードバックとして機能します。例えば、ダルマの道において、スヴァダルマに深く合致した選択をすると、まるで偶然のように物事がうまくいくことがあります。適切な人々が現れたり、チャンスが巡って来たりするのです（ポジティブなシンクロニシティ）。逆に、ダルマを裏切ると、障害や皮肉な展開に遭遇し、引き戻されるかもしれません（ネガティブなシンクロニシティ、あるいは単なるカルマの顕現と捉えることもできます）。

重要なのは、どちらのシステムもこれらの兆候への注意深さを促している点です。ユングは、シンクロニシティへの意識を育むことを推奨しました。なぜなら、シンクロニシティを認識することができれば、「強力な洞察、方向性、そして導き」が得られるからです。彼はさらに、直感的な認識を高めることで、シンクロニシティ⁴⁹の出現率を高めることができると示唆しました。同様に、インドの伝統では、探求者はしばしばシンクロニシティ、あるいは少なくともそれらに気づく能力は、人生における⁵⁵シャクティ（エネルギーの流れ）やシュリー（吉兆）に注意を払うようにと勧められています。迷信深くなるのではなく、知性ある宇宙と共に参加するのです。恩寵に協力するという姿勢があります。「神／宇宙が与えてくれるサインに従いなさい」。これは本質的に「ダルマのパンくず」に従うことです。

シンクロニシティとは、放浪する自我が帰るべき場所を見つけられるように、自己／神が道にパンくずを残すメカニズムと捉えることができます。これは心理学とスピリチュアリティの境界線を美しく曖昧にします。具体的な例として、後から考えれば運命づけられていたような偶然の出会いを通して、どれほど多くの人がグルやスピリチュアルな道を見つけるかを考えてみてください。ユングなら頷き、「まさにそれがシンクロニシティだ」と言うでしょう。そして信者は、グルの恩寵がそれを手配してくれたとだけ言うでしょう。二つの言語、一つの現象です。

ユングは著書（例えば『心理学と宗教：西洋と東洋』）の中で、西洋合理主義が因果関係を重視しすぎているため、東洋思想は非因果的な繋がりを受け入れるのに優れているとさえ述べています。道（タオ）やブラフマンの概念は、共時性が意味を成す、非因果的な秩序ある全体性を示唆しています。実際、共時性に関するユングの共同研究者の一人は物理学者ヴォルフガング・パウリであり、二人は現代物理学（量子論）がいかにして古典的な因果関係に反する繋がりを許容しているかに関心を抱いていました。東洋のホリスティック哲学は、「インドラの網」（仏教における、互いに映し合う宝石の宇宙的網のイメージ）といった概念によって、このことを予見していたと言えるでしょう。

結論として、ユング派とヴェーダ派の両方の視点において、シンクロニシティの役割は意味の道標です。それは、志願者に、自身の内なる営みが外界に反映されることを保証するものです。上にあるものは下にも、内なるものは外にも存在します。ユング派の実践において、シンクロニシティに気づくことは、精神が自己を中心に調和していることの証左となります（例えば、患者は深いセラピーや内面の変化を経験している際に、不思議なほど意味深い偶然の一致を報告することがよくあります）。精神生活において、シンクロニシティに気づくことは、ダルマが機能し、宇宙に支えられているという信念を強めることができます。こうした「パンくず」は、偶然の出会いや時宜を得た言葉など、しばしばささやかなものですが、それを体験する者にとっては、導かれているという神秘的な感覚をもたらします。ユングが書いたように、「シンクロニシティは、見る目を持つ者にとって常に存在する現実である」のです。同じことは、バクタ（修行者）やヨギ（ヨガ行者）の人生における恩寵の働きについても言えるでしょう。人の目（と心）が開いていれば、兆候はそこにあります。

53

結論

ヴェーダのダルマとユング派の個性化は、それぞれ独自の用語で、自己の漸進的な開示と完全性の達成を描写しています。両者の関係を探ることで、両者の間に豊かな対話が生れます。

古代の叢智と現代の心理学。主要なヴェーダの概念であるダルマ、カルマ、マーヤー、アートマン、モークシャは、魂の旅に宇宙的、精神的な文脈を提供し、ユングの概念である自我、ペルソナ、シャドウ、アニマ/アニムス、セルフは、精神の変容の内省的な地図を提供します。その類似点は印象的です。自我の自己に対する無知はアビディヤーを反映し、シャドウと対峙することは、ダルマに従うための低次の自己との戦いと呼応します。アニマとアニムスの統合は、シヴァとシャクティの神聖な結婚を反映し、自己の出現はアートマンの実現とブラフマンにおける解放に対応します。どちらの道でも、自己の進化は心理的、精神的、実存的な次元にまたがり、道徳的成長、感情的統合、知的理解、精神的な目覚めに総合的に取り組まなければならないことを認識しています。

28 11

比較象徴主義は、魂の普遍的な文法をさらに示しています。マンダラ、神の子、導く賢者、結びつく夫婦、光と闇など、これらのモチーフは文化を超えて繰り返して現れるもので、共通の原型を持つユングの集合的無意識の考えを裏付けています。まるで深層心理が旅の段階を知っていて、それをイメージで伝えているかのようです。インドのヨガであれ、チューリッヒの患者であれ、¹⁷³⁶ 私たちがマッピングした「キーシンボルの横断歩道」は偶然ではありません。それは人間の経験の根底にある統一性を指し示しています。ユングが述べたように、「全体性の原型」は適切な条件が整えば自然に現れますが、同様に、ヒンドゥー教の賢者は、心が浄化されるとアートマンが輝き出すと言うでしょう。

探求されてきたシンクロニシティの役割は、どちらの枠組みも運命と自由意志、外なるものと内なるものの間のダンスを優雅に尊重していることを示しています。シンクロニシティ、あるいは「ダルマのバンクズ」は、旅が孤独な闘いではないことを思い出させてくれます。宇宙、あるいは大いなる自己からの暗黙のサポートがあり、ヒントや象徴的な響きを通して私たちを導いてくれます。これは謙虚さと信頼の両方を育みます。自我が完全に支配しているわけではないという謙虚さと、誠実な努力が恵みによって報われるという信頼です。

現実的に言えば、探求者や個性化を図る現代人は、この東西融合から何を得ることができるのでしょうか？

まず第一に、心理的成長と精神的成長は深く絡み合っているという認識です。心への働きかけ — 自身の影を統合し、内なる葛藤を解決し、自分の夢を理解すること — は、カルマ・ヨーガの一種、すなわち自我を洗練させ、自己にふさわしい道具へと変える働きとなり得ます。逆に、精神的な実践 — 瞑想、帰依、倫理的な生活 — は深遠な心理的効果をもたらす、無意識の要素を解放し、個性化を促します。全体性には洞察と行動の両方が必要であることが明らかになります。無知を払拭するための知識（ジニャーナ）と、その洞察を体現するための責任ある行動（ダルマ／カルマ）です。ギーターの「行動における放棄」というメッセージは、ユングの「相反する緊張を保つ」というメッセージと類似しています。それは、世俗的な自己を抑圧することも、原型的な自己に迷い込むこともなく、それらを生き生きとした統合へと結びつけることです。

56 24

第二に、この比較は、癒しと成長に対するより包括的な視点を促します。ユング派の分析家は、瞑想を取り入れたり、患者の精神的な兆候について、還元主義ではなく敬意を持って話し合ったりするかもしれません。精神的な指導者は、弟子の心理的統合に注意を払うかもしれません。つまり、精神的健康を伴わない悟りは不均衡につながる可能性があることを理解するのです（そして、多くの東洋の伝統は、この理由から倫理的な準備とバランスの取れた心を重視しています）。これは、東洋と西洋は互いに豊かになり得るというユングの直感を裏付けています。「ユングは心理学を広げるためにヒンドゥー教と東洋の伝統の考えを頻繁に参考にしました」。同様に、現代の多くのヨガは、スピリチュアル・バイパス（精神的な考えを用いて影を抑制すること）などの落とし穴を避けるため、深層心理学から学びを得ています。

57

最後に、哲学的なレベルでは、この探求は、真実は1つだが、道は複数ある可能性を示しています。

個性化のプロセスとダルマ的解放のプロセスは、同じ人間の根源的な探求、すなわち「私は本当は何者か？」を知ること、そしてその発見の目的を達成することの二つの表現として捉えることができる。

私たちが答えを自己またはアートマンと呼ぶことは、より大きな自己認識、慈悲、
繋がりを、そして制限的な幻想からの解放。ユングと古代のリシたちは、
自己を（どんな意味でも）実現した人は「より完全な人間」となり、創造性、愛、
ユングは、個性化は個人の意味感覚と世界に役立つ洞察につながると指摘した。
普遍的な参加意識、個人の運命と集団的価値の一致 58。
バガヴァッド・ギーターによれば、アルジュナは知識を得た後、洞窟に引きこもるのではなく、
悟りを開いた視点から、ローカサングラハ（世界の幸福）のためにダルマを実践する。
頂点とは利己的な孤立ではなく、知恵をもって人生に再び入ることなのです。

結論として、ヴェーダのダルマとユングの個性化理論を比較すると、進化は
自己の統合は心理的な統合であると同時に精神的な目覚めでもある。この二つは一つの側面である。
成長の連続体。シンボルや段階の説明は様々だが、それらは同じ深い意味を語っている。
プロセスです。ウパニシャッド・マハーヴァーギヤが言うように、「タット・トヴァム・アシ」つまり汝は汝なり。あなたが求める自己はすでに汝の内にあるのです。
あなた。魂。そしてユングは、このことに呼応して、無意識の中で探し求める宝物は実際には
が常に知っていた古代のもの。課題はそれを実現することです。どちらの地図も私たちを英雄的な旅へと誘います
幻想を打ち破り、私たちの多くの部分を統合し、本来の全体性を思い出す旅。それは
外と内、神の王国は確かに内側にあり、外側の星はただそれを映し出すだけである。
ずっと私たちの心の中にあった光。

出典：上記の統合は、カール・ユングの著作と東洋の聖典からの洞察によって裏付けられています。
参考文献には『人間とそのシンボル』と『著作集』（ペルソナ、影、自己の定義について）が含まれる。 14 32
²⁴ ユングのセミナーでの東洋の概念に関するコメント、彼のエッセイ 59 60、赤い本（自己の象徴）と
「シンクロニシティ」ヴェーダ思想との類似点はバガヴァッド・ギーター（特に第3章、
7、10、18） 1 7 4、チャンドグヤ（タット・トヴァム・アシ）などのウパニシャッドやスワミによる注釈 3
シヴァナンダと他の人々はマーヤーやアビディヤーのような概念について 62 現代の通訳者（ワングなど）は
ユングと東洋哲学を明確に比較することもこの議論に影響を与えた。これらの情報源 63 28。
心理学と精神性が深遠に融合し、
自己。

1 (LXXVIII) 古い魂は愛を求めない — 彼らはなぜ生まれてきたのかを覚えている | ウトカルシュ・パルハテ | 2025年6月 | Medium <https://medium.com/@utkarshparhate40/lxxviii-old-souls-dont-look-for-love-they-remember-why-they-came-60452f1a79c8>

2 35 56 59 60 1. カール・ユングの「ブラフマン」論 - アンソロジー <https://carljungdepthpsychologysite.blog/2020/03/22/brahman-anthology/>

3 10 チャンドグヤ・ウパニシャッド (1) - 汝は http://yogananda.com.au/upa/Chandogya_Upanishad.html

4 https://www.gitasupersite.iitk.ac.in/srimad?etsiva=1&etpurohit=1&etgb=1&etssa=1&etadi=1&choose=1&&language=ro&field_chapter_value=10&field_nsutra_value=20

5 6 11 28 29 30 31 41 42 43 54 57 58 カール・ユングの心理学への貢献 : ユング + ヒンドゥー教 | CA <https://www.happinesspsychiatrist.com/post/carl-jung-contribution-to-psychology>

7 8 62 https://www.gitasupersite.iitk.ac.in/srimad?language=dv&field_chapter_value=7&field_nsutra_value=14&etsiva=1&etsiva=1&etpurohit=1&etgb=1&setgb=1&etssa=1&etassa=1&etradi=1&etadi=1

9 BG 10.11: 第10章、第11節 - バガヴァッド・ギーター、神の歌 <https://www.holy-bhagavad-gita.org/chapter/10/verse/11>

12 26 33 34 37 44 63 ユングの「真我」、ヒンドゥー教のアートマンと仏教徒のアナッタ | マドゥ・バザズ・ワング <https://www.madhubazazwangu.com/2010/08/jungs-self-hindu-atman-and-buddhist-anatta/>

13 14 15 16 22 ペルソナ - 国際分析心理学協会 - IAAP <https://iaap.org/jung-analytical-psychology/short-articles-on-analytical-psychology/persona-2/>

17 18 19 20 32 カール・ユングにとって影とは何か? | TheCollector <https://www.thecollector.com/what-is-shadow-according-to-carl-jung/>

21 誰か、私がアニマとアニムス 5 であるかのように説明してくれませんか? : r/Jung https://www.reddit.com/r/Jung/comments/zzux9u/can_someone_explain_like_im_5_the_anima_and_animus/

23 45 46 心理学に関するブログ: アニマ - アニムス インディアンの見解 - アルダナリシュヴァラ <http://ablogonpsychology.blogspot.com/2012/07/anima-animus-indian-view.html>

24 25 27 38 自己 : 全体性の原型 - Denise Grobbelaar <https://denisegrobbelaar.com/blog/post/self-archetype-wholeness>

36 39 40 マンダラ 定義、歴史、種類、意味、事実 | ブリタニカ <https://www.britannica.com/topic/mandala-diagram>

47 48 49 50 51 52 53 55 61 カール・ユングのシンクロニシティ論 - 思考の芸術 <https://artsofthought.com/2020/05/30/carl-jung-synchronicity/>